

金属労協第 58 回協議委員会
神津理季生 連合会長 挨拶（要旨）

2016 年春闘を「底上げ春闘元年」に

最初に、金属労協の立場として、それぞれの産別の立場として、連合運動を日頃から支えて頂いていることに、また、連合本部、地方連合など連合運動を支える要所要所に貴重な人材を派遣していただいていることに、心から感謝申し上げたい。

本日の協議委員会は、2006 年春闘の基本方針を決める重要な場である。私自身、金属の仲間の皆様と共に育ってきた生い立ちを踏まえ、私の考えの一端を述べさせて頂きたい。

世の中で言われる「春闘」の歩みは、まさに 60 年に達しようとしている。私どもの先輩達の時代を振り返れば、その昔は、経営側に労働者の声を聞く耳を持ってもらうために、ストライキという実力行使に訴えざるを得ない時代もあった。昭和 30 年頃から、ようやく労使交渉という仕組みをできはじめた。当初は労使の距離感が遠かったが、一步一步、労使双方が共に、世界経済、日本経済、産業・企業の状況についてしっかりとした状況認識について、議論を深めてきた、積み重ねの結果として今がある。労使が同じテーブルについての話し合いと言っても、まさに闘いであり、私たちは、労使の接近戦という形を志向してきた積み重ねの上に今日があると、私自身の思いを含めて受け止めている。

2006 年春闘においては、相原議長が挨拶の中で述べられた 3 本柱の中の 2 本目「非正規労働者に関しては、正社員への登用促進、非正規労働者の状況や課題の把握を行っていくと共に、組合員か未組労働者かを問わず、具体的な賃金・労働諸条件の向上に取り組む」、そして 3 本目「政

策・制度課題、産業政策においては、適正取引の確立とバリューチェーンにおける『付加価値の適正循環』を重要課題として取り組む」ことを打ち出されたが、まさに連合と期を一にしている。全労働者のための連合としても、のちのち連合の 2006 年春闘への取り組みを振り返ったときには、「底上げ春闘元年」であったと言われるぐらいの踏み込みを絶対にしていきたいと思っている。

3本柱の2本目の「非正規労働者」への取り組みに対して、連合としても全労働者のためにという取り組みにおいても、JCMとしても「組合員か非組合員かを問わず、具体的な賃金・労働諸条件の向上に取り組む」ことを打ち出されているが、極めて重要なことだと思う。これまでの取り組みの延長線上であってはならないとされている。3本目についても、中小企業をはじめ、バリューチェーン全体で適正な成果配分を実現するなど、従来にない踏み込んだ要求基準を掲げられていることにJCMの意気込みを感じる。従来も春闘のリーダー役として役割を發揮してこられたが、これからの2006年闘争の取り組みにおいても是非これらの要求を前面に掲げ、中心軸として取り組んでいただきたい。

いずれにしても、2014年、2015年闘争とまさにJCMの皆様が大変すばらしい成果を引き出していただいた。このことは、世の中に、賃上げが一回限りではなく、中期的に続いていくものなのだとすることを予感させた。そういう持続性につなげられるかどうか問われる2016年の春闘になる。その意味で、連合の立場からJCMの皆様の闘いに大いに期待するとともに、是非、JCMの闘いの勢いを、連合全体のうねりとしていきたい。共にがんばりましょう。